

『冷血』研究 (4)

—動物の表象—

大 園 弘

はじめに

『冷血』(*In Cold Blood* 1965) はアメリカのカンザス州ホルカム (Holcomb) で1959年11月15日未明に発生したクラター (Clutter) 氏一家殺人事件を素材としたトルーマン・カポーティ (Truman Capote 1924-84) の代表作である。ノンフィクション・ノヴェルではあれ、当然のことながら、小説化されたこの殺人事件は、現実の事件そのものを忠実に再現したものではありえない。もちろん、「現実の事件を忠実に再現する」ことなどは、そもそも不可能なことであり、同一の事件であっても、「再現」の過程で、それを試みる者の意図、感受性、視点等の作用によって事件の在りようは様々に再現され得るのである^①。

したがって、『冷血』は、カポーティの意図や感受性や視点等から成るフィルターを通して観た場合のクラター氏一家殺人事件の物語であり、彼は膨大な記録と記憶を源にして自らの物語を紡いでいった^②。その際にカポーティが指針としたもののひとつが、「選択 (selection)」である。「選択が大切だ。それがなければどこにも辿り着けない。(中略) 何を語るか、またそれをどう語るかを選択することで自分の言いたいことを伝えるのだ。」^③彼はプリンプトン (George Plimpton) によるインタビューでそう述べている。

『冷血』においてカポーティが語りたかったこと (「何を語るか」) についての議論は、すでに出つくした感がある。それらの議論の中心に据えられてきた

のは、もちろん、殺人者のひとりペリー・スミス (Perry Edward Smith) であるが、カポーティはペリーのイメージを形づくるうえでも、様々な意匠 (「どう語るか」) をこらしているように思われる。その工夫のひとつに動物の表象がある。なかでも、ペリーとディック (Richard Eugene Hickock) が一時的に拘留されていたフィニー郡庁舎内に設置された牢獄のそとを徘徊する二匹の雄猫が両者の象徴⁽⁴⁾として描かれているという点は誰の目にも明らかであろう。この典型的な例のほかにも、作者が動物のイメージを意図的に用いていると思わせるような場面は少なくはない。クラター一族を代表してペリーらの公判を傍聴したクラター氏の弟アーサー (Arthur) は、傍聴に臨んだ理由を「わたしはただやつら [スミスとヒコック] の顔をよく見たかっただけです。やつらがどのような動物であるかを見たかっただけです」⁽⁵⁾と新聞記者たちに語っている。また、ペリー側の証人としてはるばるボストンからフィニー郡を訪れていたカリヴァン (Donald Cullivan) に対し、ペリーは逃亡生活の様子を次のように語っている。

ディックといっしょにそとで、気違いのように走りまわっていたときには、わたしもずいぶん体重が減っていたんだよ—まともな食事にありつけることはほとんどなく、たいていいつも腹ペコだったからね。もう動物みtainな生活をしてたんだよ。(中略) まるで動物だね。(傍点筆者、290)

動物の表象という観点から『冷血』を読み返すと、この物語には少なからぬ種類の動物が「登場」していることにあらためて気づかされる⁽⁶⁾。馬、猫、犬、コヨーテ、オウム、リスなどである。そして、上述の雄猫ほど明確ではないにせよ、それらの動物たちにも何らかの重要な意味合いを読み取ることができるように感ぜられる。換言すれば、それらの動物たちは、何らかを語るために作者によって意識的に選択された手段であるかのように思われる。よって本稿では、この仮説に基づいて、それぞれの動物たちに読み取ることのできる含意を

考察していきたい。

I. 馬・猫・犬

4部構成の『冷血』の第1部「生きた彼らを最後に見た者」(“The Last To See Them Alive”)では、クラター氏一家殺害(1959年11月15日未明)の前日(14日)から遺体発見(15日午前)までのわずか1日の被害者加害者双方の行動が、ほぼ交互に描き連ねられている¹⁷⁾。とりわけ、犠牲者4名—ハーバート・クラター、妻ボニー、三女ナンシー、末っ子のケニヨン—に関しては、クラター氏一家の家族像を鮮明に浮かびあがらせるべく、殺害前日の彼らの行動のみならず、日頃の生活ぶり、性格、周囲の評判などの様々な側面に触れられている。

この第1部には、クラター氏宅で飼われていた馬、猫、犬も、一家の日常に欠かせない存在として描きこまれている。ナンシーは、親友のスーザン(Suzan Kidwell)と「一家の人気者だった(“the family favorite”)」(12)愛馬ベープ(Babe) —「亜麻色のたてがみと、すばらしいパンジーの花のような濃い紫色の目をした、おとなしく、年老いた、まだらの雌馬」(207) —にまたがり、よく川に出かけた。「ナンシーは川が大好きでした。夏の夜、わたしたちはよくナンシーの馬—ベープ—に相乗りしたものですわ—ほら、あの太ったあし毛の老馬がいたでしょ? 川までまっすぐに出かけて、そのまま水の中へ入っていくのです。それから、浅瀬を渡っていくベープの背中で、わたしたちはフルートを吹いたり、歌をうたったりしました。」(94) スーザンのこの回想は、第4部「隅っこ」(“The Corner”)における語り手(作者であるカポーティ自身)の次のコメントと相俟って、ベープ(馬)が、ナンシーにとって大切な存在であったことを読者に強く印象づけている。

そのふたりの少女は、よくベープの幅の広い背中にいっしょにまたがって、暑い夏の夕方などには、小麦畑の間を通りぬけて川まで降り、この雌馬が流

れにさからって川の中を歩いてわたるとき、彼女たちはそのまま背中に乗っていて、スーがかつて述べたように、ついには「わたしたち三人もお魚のように冷たくなった」のである。(271)

ナンシーは殺害される前日の土曜日の午後も、すなわち、殺されるわずか10時間ほど前にもベープにまたがり川へ出かけていた。

ナンシーは猫も何匹か飼っていた。なかでもエヴィンルード (Evinrude) と名づけられた猫は彼女のいちばんのお気に入りだった。それを知っていた親友スーザンは、ナンシーの死後、「ナンシーの孤児となったペットのひとつであったこの猫を引きとっていた」(271) ののであるが、スーザンのそうした配慮に、ナンシーのこの猫に対する愛着が物語られてもいる。

「ケニヨンが数年前に拾ってきた野良犬」(13) のコリー犬テディー (Teddy) もまた、家族の一員に等しい存在だった。番犬ではありながら、「銃をちょっとでも見せると、(中略) 頭を垂れ、尻尾を巻いてしまう」(12) という欠点を持つテディーではあったが、この老犬は、一家が殺害される前日、朝の見回りをするクラター氏に、また、同日の午後には川に出かけたナンシーとベープにお供をした。事件後、「ガーデン・シティーからきた女の人がケニヨンの犬もつれていった」が「テディーは逃げ出して、ホルカムまでもどってきた。」(94) それほど、この犬はクラター家の日常生活に溶けこんだ存在だった。

馬、猫、犬。いずれの動物も古来より人間の日常生活と深く関わりあってきた存在である。その意味においては、クラター家の生活の様子を再現する過程で、上述のような家族の者たちと動物たちの関係が描きこまれることは、何ら不思議なことではない。だが、ひとたび加害者たちに目を転じ、そこにクラター家の場合と同じく馬・猫・犬という共通の動物たちが、加害者たるペリーとディックの素描にも用いられているということに気づいたとたん、作者がクラター家のペットたちに言及したこと、すなわち、作者がクラター家のペットた

ちに言及することを[・][・][・]選択したことが、ある特殊な意味を帯びてくる。

ペリーはアイルランド人のカウボーイとインディアン（チェロキー族）の母とのあいだに末っ子として生まれた混血児であった。ペリーが5歳になるまで、両親はロデオの興行を生業としていた。ペリーの記憶は3歳の頃まで遡ることができたが、そのひとコマは「賞讃とうっとりするような魅力の織りまざった」(130) 次のような場面であった。

たぶん3歳の頃だっただろう。野外のロデオで、彼は姉たちや兄といっしょに正面観覧席にすわっていた。リング内では、ほっそりとしたチェロキー族の娘が「はね野生馬（バックング・ブロンコ）」といわれる野生馬にまたがっていた。彼女の乱れた髪は前後にはげしく揺れ動き、フラメンコの踊り子のように跳びはねた。彼女の名前はフロ・バックスキンといい、プロのロデオの名人であり、「野生馬乗りのチャンピオン」であった。彼女の夫、テックス・ジョン・スミスも同様だった。（中略）（ペリーはさらに多くのロデオの情景を思い出すことができた—くるくるまわる投げなわの中で、はね動いている父親の姿、あるいは、銀とトルコ石の腕輪を両手首にまき、命知らずのスピードで曲乗りを披露して、末の子をひやりとさせたり、テキサスからオレゴンにかけての町々の観衆たちを「総立ちにさせ、拍手を呼んでいる」母親の姿などがふたたび目に浮かぶのであった。）(130-131)

ペリーの脳裏に甦るこれらの情景の中の馬とナンシーの愛馬ベープとの違いは誰の目にも歴然としている。それは野生馬と飼い馴らされた馬という極めて対照的な相違である。

さて、猫についてはどうであろうか。「車のエンジンのグリルにひっかかって死んでいる鳥を探して」(264) フィニー郡庁舎の広場をうろつきまわる「いつも一緒にいる二匹の灰色の雄猫—奇妙で利口な習性を持った、痩せて小汚い

野良猫―」(246)がペリーとディックの人生を象徴するものであるということとは前述のとおりである。ペリー自身そのことを自覚しており、郡庁舎内に設置された官舎に住む保安官代理の妻であるジョーゼフィン・マイヤー (Josephine Meier) に、自分がその猫たちと「同等である (“The equivalent”）」(264)と語っている。野良猫と飼い猫。それは、野生馬と飼い馴らされた馬という対照的な関係を自ずと想起させる。

ディックと猫との関係についても注目したい。「自分の頭より深い川にはまってしまったケチな悪党」⁽⁶⁾という作者によるディック評は、作品の中では「作者の代弁者」⁽⁹⁾である捜査官デューイ (Alvin Dewey) の「空虚な無価値の暗闇から這い出てきた三流詐欺師」(340)というディック評に反映されているとおりであり、ディックのこの物語に占める重要度は、ペリーのそれに比して極めて低い。しかしながら、そのようなディックではあっても、本稿の趣旨からすれば、彼に付与された猫のイメージを見過ごすわけにはいかない。

ディックを猫と結びつける要素はふたつある。ひとつは、彼の右手に施された入墨である。ディックの「右手には、全体に歯をむき出して笑っている (grinning) 猫の顔が青い色で入墨してあった。」(30)物語の別のところには、ディックを指して「右手に青猫の入墨をした男」(89)と表現された場面が見当たることからも、猫はディックの代名詞であるようにすら感じられる。ディックを猫と結びつけるもうひとつの要素は、デューイの妻マリー (Marie) がディックの顔写真―「警察で作った『容疑者の人相書』 (“police-made “mug shots”）」(164)を見て抱いた印象の中に表れる。夫が持ち帰った容疑者たちの顔写真を見たマリーは、ディックの目につぎのような印象を抱いた。

マリーはヒコックの目に射すくめられ、子供のころのある出来事を思い出した―彼女は一度、わなにかかった山猫を見たことがあった。そして、それを逃してやりたいと思ったが、苦痛と憎悪にらんと輝く山猫の目を見ると、彼女の心からは憐憫の情が消え、恐怖に満たされた。(164)

「歯をむき出しにして笑っている猫」、「苦痛と憎悪にらんと輝く山猫の目」という表現がかもし出す猫のイメージはナンシーの飼い猫エヴィンルード—「ナンシーはペープの背中からすべり降りると、花壇の端の草の上に大の字に寝ころび、猫をつかんで頭上に上げて、その鼻面と頬ひげにキスした」(40)—とはほど遠く、フィニー郡庁舎の広場をさまよう二匹の野良猫に近い。

最後に犬についても触れておきたい。ベリーとディックは犯行後のおよそひと月半のあいだ、逃亡生活を送る。犯行から約10日が経過した11月24日、ふたりはメキシコでの二日目を迎えていた。とある岬でピクニック気分の昼食を済ませ、ふたりはメキシコ・シティーを目指して車を走らせるのであるが、彼らの目には「車の前方の埃っぽい道を、暖かい太陽の光を浴びながら、一匹の犬がトボトボ走っていくのが見えた。」(110) この変哲もない場面描写の中の犬は、この場面に続く vignette の最後の場面でも言及される。「その犬はボキボキ折れそうな骨をした、薄ぎたない雑種犬で、半分死にかけていた。」(112) 野良犬とおぼしきこの犬は、ディックの趣味—「彼は機会があるごとに、必ず犬を狙った」(113)—の犠牲となって罾き殺されることになるのであるが、この雑種犬こそ、死(刑)以外の確たる目的もなくさまようベリーとディックの象徴であり、クラター家の飼い犬ディーとは対照的である。

以上考察してきたとおり、馬、猫、犬をめぐるイメージはクラター家の場合とベリーらの場合では大きな相違を呈している。クラター家の動物たちが、飼い馴らされ、ペットとしての属性を帯び、生命の危機とは無縁であるものとして描かれている一方で、ベリーらに重ねられた同じ動物たちのイメージは、デューイが抱いたベリーの印象—「傷つきながらさまよい歩く動物が持っているような靈気」(341)—に端的に表現されているように、野生、凶暴性、死などとのアナロジーを有している。

馬、猫、犬をめぐるこれらの対照的なイメージは、たんに被害者と加害者という立場の相違を際立たせるにとどまらない。それは、ロングが述べているよ

うに、「持てる者と持たざる者」⁽¹⁰⁾といったアメリカ社会の明と暗（光と闇）の二極面の象徴とも考えることができるであろう。

II. コヨーテ

ベリーとディックは公判を迎えるにあたり、精神科医のジョーンズ博士（Dr. Jones）の要請を受けて「自伝的文章（“autobiographical statement”）」（273）を綴った。ベリーはその中で、7歳ごろのサン・フランシスコ時代—母親は4人の子供たちを連れて同地で別居生活をはじめたばかりだった—を次のように振り返っている。

・・・フリスコではわたしはたえず問題を起こしていた。わたしは自分より年上の仲間たちとうろつきはじめていた。母はいつも酔っ払っていて、わたしたちをちゃんと養ったり世話したりできる状態ではなかった。わたしはまるでコヨーテのように、自由奔放にかけまわっていた。法律とか規律とかいったものはまったくなく、わたしに善悪の区別を教えてくれるような人間は誰もいなかった。（傍点筆者 275）

周知のとおり、コヨーテは北米大陸に広く分布する、オオカミに似たイヌ科の動物である。ネズミやウサギなどの小動物を捕食し、人里近くでは残飯を漁ったり家畜やペットを襲ったりすることもあるという。「猟銃で射ち殺されたコヨーテの死骸」が「牧場のフェンスに花飾りのようにぶらさがっている」（232）車窓の風景—逮捕地ラス・ヴェガスからカンザス州ガーデン・シティーに移送される途中の、ベリーの目に映った風景—からも、コヨーテが人間にとっての厄介ものであることは明らかだが、ベリーが法律や規律といった人間社会の規範とは無縁の厄介ものたる自らの姿をコヨーテになぞらえるのは納得がゆく。その意味では、コヨーテは前節で触れた野生馬、二匹の雄猫、山猫、道路わき

の野良犬と何ら変わりはない。

だが、本節でコヨーテに注目する理由は別のところにある。まずは、犠牲となった少年ケニヨンに関する以下の記述を見ておきたい。

彼には親友はたった一人しかなく、それはクラター家の西方1マイルのところにある農場を持つテラー・ジョーンズ (Taylor Jones) の息子ボブ (Bob) ・ジョーンズであった。カンザス州の田舎では、男の子は非常に若いころから車の運転をはじめますが、ケニヨンの場合は、彼が羊を育てて稼いだ金でモデルAのエンジン付きの中古トラックを買うことを父が許してくれたのが11歳のときだった。その車を、彼とボブは「コヨーテ・ワゴン」と呼んでいた。リヴァー・ヴァレー農場からあまり遠くないところに、「サンド・ヒルズ」として知られているふしぎな場所がある。そこは海のない海岸みたいところで、夜になると、コヨーテが砂丘の間をこそこそ歩きまわり、やがて群れをなして遠吠えをはじめるのである。月夜の晩には、この少年たちは、砂丘にワゴンを乗り上げ、コヨーテをとつぜん襲って追いちらし、ワゴンに乗ってやつらと競争するのだった。だが、めったにそれはやらなかった。いちばん痩せこけたコヨーテでも、時速50マイルで走るというのに、ワゴンのほうは最高速度が35マイルしか出なかったからだ。しかし、それは野生的な美しい遊びであった。ワゴンは砂丘を横すべりしながら走り、逃げてゆくコヨーテは月を背景に影絵のように動き—ボブのいったように、それはたしかに心躍る光景であった。(38-39)

引用文中の「コヨーテ・ワゴン」の操り手であるケニヨンは、自らをコヨーテになぞらえたベリーと対立しあう関係にあると言えるであろう。だが、両者の関係性は、前節でみた飼い馬と野生馬、飼い猫と野良猫 (山猫)、飼い犬と野良犬の関係性とは異質であるように思われる。すなわち、飼い馬と野生馬や飼い猫と野良猫といった関係性は、力 (凶暴さ) の点で、明らかに後者が前者

を凌いでいる。後者が殺人者たちのイメージと重なりあう所以である。しかし、「コヨーテ・ワゴン」の操り手ケニヨンとコヨーテたるペリーの力関係は、間違なく逆転しており、ケニヨンは「コヨーテを悩まし、月夜の晩には彼らを追いまわす」(270) 優位な立場にある。

注目すべきは、こうした立場の逆転を通して見えてくる、あるアメリカ社会の現実である。

上掲の引用文は、単にケニヨンの趣味を紹介するために、作者によって「選択された」とは考えにくい。前述のとおり、『冷血』の第1部には、ペリーらの犯行前の行動とあわせて、クラター氏一家の家族像が描きこまれている。上掲のケニヨンのプロフィールも第1部からの引用であるが、作者は第1部で被害者4名の特徴を詳述しつつ、アメリカの共同社会、とりわけ、クラター一家に象徴されるような、安定確固とした、非の打ちどころのない人生の成功者たちが含み持つ欠点―保守性、排他性、暴力、驕慢など―をあばき出しているのである⁽¹¹⁾。4者の素描には、いずれもそうした欠点と結びつく要素がさりげなく描きこまれているのだが、ケニヨンについての欠点は、上の引用箇所をはじめとする数箇所ですべて暗示されている。作者はそれらの記述をとおして、ケニヨンが狩猟好きであること、動物を殺すことに異常なほどの情熱を持っているということ、動物の扱いが乱暴なこと―「お前は馬を乱暴に扱いすぎるよ」と父は彼に注意したことがあった。「そのうち、スキーターの命を奪うことになるぞ。」そして、そのとおりのことが起きてしまった」(40-41)―などに触れながら、ケニヨンがペリーよりもはるかに強い暴力への性向を秘めていたことをほのめかしている⁽¹²⁾。

以上のように、カポティはコヨーテという、ペリーにもケニヨンにもかかわりのある動物のイメージを「選択する」ことで、アメリカ社会の明(光)に潜む欠点を批判的に描きだしている。

Ⅲ. オウム

ベリーによると、「キリストより背丈が高く、ヒマワリのように黄色い」(93) オウムが夢に初めて現れたのは、彼が7歳のときだったという。アル中の母親が子供の養育能力を失ったために、ベリーはカリフォルニア州の孤児院に預けられることになった。その孤児院で、寝小便を理由に尼僧から懐中電灯でさんざんぶたれたあとに、そのオウムが彼の夢に現れ、「そいつがくちばしで尼さんどもを旨にし、その目玉を食べてしまい、やつらが「命乞い」するうちに、やつらを殺してしまい、それからとてもやさしく彼を抱き上げ、包みこんでくれ、楽園まで連れていってくれた」(93)という。その後も、このオウム―「戦士の天使 (“a warrior-angel”）」(93)―は、ベリーがひどい苦痛を体験するたびに、夢に現れ、彼を救ってくれた。

7歳のときに経験した孤児院での虐待を考えると、このオウムが「復讐天使 (“an avenging angel”）」(266)としての性格を帯びていることは当然であろう。とは言え、この「復讐天使」は、そもそもなぜ「(キリストより背丈が高く、)ヒマワリのように黄色いオウム」の像を結んだのであろうか。この難問に答えることは、おそらく、夢分析の専門家にすら至難の業であろう。また、かりに解明ができたとしても、そのことにさして大きな意味があるとは思えない。だが、「なぜ」という疑問を「ヒマワリのように黄色いオウム」が何を象徴するのかという問題設定に切り替えてみると、ひとつの仮説に辿り着くことができるのではないだろうか。つまり、「ヒマワリのように黄色いオウム」はやがてベリーの憧れ(「夢」)そのものを象徴するようになった、との仮説である。そこで、まずは「ヒマワリのように」と形容された「黄色」の意味を、ついで「オウム」の意味を考察したい。

ヒマワリから類推する色彩は、もちろん、黄色である。であれば、「ヒマワリのように黄色い」という表現は、実に陳腐な比喩であると言わざるをえない。しかし、ヒマワリが喚起するイメージは多様であって、その形状は「太陽」を

想起させ、季節との関連では「夏」を連想させる。さらには、「ヒマワリの黄色」が「太陽」や「夏」と結びつくことによって、ヒマワリは「南国」のイメージや「暖かさ」の感覚に連鎖しさえする。

ところで、「たえず旅行についての空想を楽しむ人間」(14) だったペリーが大切にしていた品々のひとつに地図があった。作者は、その地図にインクで円く囲まれた地名として、ユカタン半島の沖合の島コズメル (Cozumel)、アカプルコ (Acapulco)、シエラ・マドレ (Sierra Madre) を挙げている。いずれもメキシコ国内の島名、地名、山脈名である。これらの場所は、ペリーとディックがクラター一家から大金を盗み、全員を殺害したのちに向かう予定の逃亡先でもあった。彼らは「国境の南の国の島々や海岸で、スキン・ダイビングや宝探しをやってふたりで暮らす夢」(91) を抱いていたのである。

このように考えてくると、「ヒマワリのような黄色」は、ペリーの意識の中で、アメリカ南方の暖かい国メキシコのイメージそのものだったと推測することができる。

オウムについても、メキシコ、とりわけコズメル島との関連が深い。ペリーはかつて男性向け雑誌に掲載されたコズメル島の記事を記憶していた。それによると、その島では「衣服など脱ぎすて、そのかわり寛いだニヤニヤ笑いを身につけ、インドの王様のような生活を送り、ほしい女は誰でも、1ヶ月たった50ドルで手に入れることができ、(中略) コズメルは社会的、経済的、政治的圧力に抵抗する一拠点となっている。この島では、いかなる警官も個人を追いまわすことがないし、それに、毎年、たくさんのオウムが卵を産むために大陸から渡ってくる」(14-15) のだった。すなわち、コズメルはペリーにとって、過去から現在に至るまで彼を悩ませてきたさまざまな「圧力」から解放され、欲望の赴くままに生きてゆくことのできる地上の楽園だった。そして、この楽園への渡り鳥であるオウムは、とりもおさず、ペリーをこの地上の楽園へといざなってくれる導き手としての象徴的な意味を帯びていたのであった⁽¹³⁾。

Ⅳ. リス

ペリーは、公判で死刑の判決を受けランシング (Lansing) の州立刑務所に移されるまでのおよそ3ヶ月間をフィニー郡庁舎内の拘留所で過ごした。拘留所は郡庁舎の4階にあり、ペリーの独房の窓すれすれに、ニレの樹のてっぺんの枝が伸びていた。ペリーはその樹に棲むリスの一匹―「金褐色の毛をした雄リス」(254)―を何週間もかけて、朝食の残り物で独房の中におびき寄せすることに成功した。ペリーは「レッド (Red)」と名づけたこのリスに幾つかの芸を教えこんだり、レッドの肖像をスケッチしたりしながら時を過ごした。

この3ヶ月の間、別の独房に入れられていたディックには父親が面会に訪れたことがあったが、「例のリスを除くと、また、マイヤー夫妻や、ときたま相談にやってくる弁護士のアレクサンダー氏 (Mr. Alexander) を除くと、ペリーはたいてい独りぼっちだった。」(259) 一度は、軍隊時代の友人であるカリヴァンが人物証人として出廷するために、はるばるボストンからフィニー郡にきた際、ペリーを独房に訪ねてくれたが、ペリーにとってカリヴァンは、手紙を受け取って思い出す程度の存在にすぎなかった。ペリーの父と姉バーバラ (Barbara) はこの3ヶ月間だけではなく、ペリーらがランシングに移されて死刑が執行されるまでの5年の間に一度もペリーを訪ねることはなかった。バーバラはペリーらが逮捕される前に自宅のあるサン・フランシスコで捜査官のナイ (Harold Nye) から事情聴取を受けた際、「お願いですから、万一あの人 (ペリー) にお会いになっても、わたしの住所は教えないでください。わたし、あの人がかわいんですもの」(182) とナイに頼んだほどだった。「ペリーの『本当の、唯一の友』」(42) であったウィリー＝ジェイ (Willie-Jay) ―かつての刑務所仲間で、「ペリーの価値と可能性を認識し、彼がただの寸足らずの、筋肉の発達しすぎた混血児ではないことを認めてくれた」(45) 人物―は、刑務所時代には「この男 (ペリー) を神のみもとへつれてゆこう」(42) と考えてくれたことがあったが、頼みの綱のウィリー＝ジェイさえ、一度もペリーの前

に姿を現すことはなかった。

こうした孤独の極みにあって、レッドがペリーの慰みであったことは間違いない。しかし、このレッドの存在は、却ってペリーの孤独を強調しているのではないだろうか。いまやペリーにとっての「本当の、唯一の友」はウィリー＝ジェイではなく、レッド以外には存在しないという現実を、レッドは読者に訴えかけている。レッドが人間ではなく動物であることを考えれば、ペリーの孤独は一段と悲壯感を増すのである⁽¹¹⁾。しかも、ペリーはランシングに移されることで、このレッドとも切り離されてしまった。3ヶ月間、ペリーの面倒をみてきたマイヤー夫人は、ペリーが移送されて1週間後に「あの人がかわいがっていたあのリスも、きっとペリーがいなくなって寂しがっていますわ」(308)と友人に語っているが、この言葉の背後に見えてくるのはペリーの孤影のみである。

むすび

「選択が大切だ。それがなければどこにも辿り着けない。」カポーティはそう語った。むろん、目的(地)があってこそその選択である。目的(地)は作家によって定められ、読者は作家によって選択されたものごとを通して、その目的(地)へといざなわれる。『冷血』執筆にあたり、カポーティが幾種類かの動物を意識的に選択したことは明らかである。本稿では選択されたそれらの動物たちから、カポーティの目的(地)を探ってきた。その結果、幾つかの目的(地)が明らかになった。

カポーティは飼い馴らされた馬、猫、犬を、それぞれ、野生馬、野良猫(山猫)、野良犬と対比させることで、被害者と加害者の住む世界を描き分けつつ、明と暗というアメリカ社会の両極の現実を浮き彫りにした。また、コヨーテを野生馬、野良猫(山猫)、野良犬の延長線上に置きながら、野生の動物さながらのペリーら犯罪者たちの生き様を描きだす一方で、アメリカの共同社会に潜

む少なくともひとつの欠点(暴力)を同時にあばきだした。ペリーの夢にたびたび現れたオウムは、幼少の頃から彼を悩ませてきた一切切の苦悩から彼を解き放ってくれる救済者の象徴であった。オウムの黄色はペリーの南国(メキシコ)への憧れを表していた。そして最後に、独房のリスはペリーの孤影をくつきりと浮かびあがらせた。

「ティファニーで朝食を」(*Breakfast at Tiffany's* 1958)のホリー(Holly Golightly)が飼っていた名無しの猫を例に挙げるまでもなく、カポーティの作品に動物の表象が用いられることは前例がないわけではない。また、「冷血」において、上記と同じ目的(地)が動物以外の「選択肢」によっても暗示されていることも認めざるをえない。だが、これほど多くの動物たち一本稿で採りあげたのは、全体の一部である—がひとつの作品に集中しているのは、やはり、カポーティの他の作品には見られない、この作品独自の特徴であろう。

「冷血」は、作者の主観が前面に出ることを極力避け、あくまで事実に基づく物語であることを目指した実験作であった。だが、物語であるからには、作者の主観を完全に排除することは不可能である。主観を前面に打ち出すことなく、作品の中に主観をしっかりと描きこんでいく手段のひとつとして、カポーティは動物の表象を選択したのであろう。

注

- (1) マクドナルドは「事実は、カメラの数だけ存在するわけであり、個々の事実は真実の一部ではありえても、真実そのものではない。どの事実が選択されるかによって違いが生じるのである」と述べている。Macdonald, Dwight. "Cosa Nostra." *Esquire*, 65 (April) 1966: 46.
- (2) カポーティはグローバルによるインタビューの中で、「純粋に調査だけでも8,000ページ近くにもなった」と述べている。Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985: 112. また、プリンプトンには「当時の数年間の取材で得たすべての素材のうち、ほんの20パーセントを使っただけでも、2,000ページの本になっただろう」と語っている。Plimpton, George. "The

- Story Behind a Nonfiction Novel." *Truman Capote's In Cold Blood: A Critical Handbook*. Ed. Irving Malin. Belmont, California: Wadsworth Publishing Co., 1966: 30.
- (3) Plimpton. "The Story Behind a Nonfiction Novel." 32.
- (4) Nance, William L. *The Worlds of Truman Capote*. New York: Stein and Day, 1973: 194.
- (5) Capote, Truman. *In Cold Blood*. New York: Random House, 1965: 280. 傍点筆者。
以下、このテキストからの引用は全てこの版により、括弧内に引用頁数のみを記す。
- (6) ハッサンはカポーティが「作中人物たちのまわりに動物的イメージの網をめぐらしている」と指摘しているものの、詳述はしていない。Hassan, Ihab. *Contemporary American Literature 1945-1972 - An Introduction*. New York: Frederic Ungar Publishing Co., 1973: 51-52.
- (7) クラター一家の殺害の場面は第1部では触れられておらず、第3部以降でペリーらの逮捕後の供述をとおして明らかにされる。
- (8) Grobel. *Conversations with Capote*. 118.
- (9) Nance. *The Worlds of Truman Capote*. 193.
- (10) Long, Robert Emmet. *Truman Capote - Infant Terrible*. New York: The Continuum International Publishing Group Inc., 86. なお、カポーティ自身も、「クラター家とペリー及びヒコックはアメリカ社会の両極を象徴している」と語っている。Inge, M. Thomas, ed. *Truman Capote: Conversations*. Jackson, Mississippi: UP of Mississippi, 1987: 133.
- (11) 岩元巖『現代のアメリカ小説―対立と模索』英潮社、1974年。126.
- (12) *Ibid.*, 127.
- (13) 稲澤秀夫『トルーマン・カポーティ研究』南雲堂、1970年。167.
- (14) *Ibid.*, 173.